

三位一体主日 説教 「蛇のように、鳩のように」 要旨

牧師 黒田直人

日本キリスト教団藤沢教会 2022年6月12日

マタイによる福音書 10:16~10:25

先週は聖霊降臨の出来事を覚えて、ペンテコステを共に祝いしましたが、その私たちが伝統として守り続けてきたものがその翌週の三位一体主日でありました。それは、私たちの崇めるものが、父なる神様か、それとも子なるキリストか、あるいは、聖霊なる神かと、どれにしようかというものではないからです。このことはまた、三位一体なる神様を礼拝するという事は、私たちが三位一体なる神様との交わりの中に置かれているということであり、神様と私たちとの関係性は、それゆえにとても近くに感じることができるということなのです。このように、私たちの神様は私たちの手の届かないような遠くいますお方ではなく、神様とイエス様から発出される聖霊の働きによって、私たちのすぐ近くにおられるお方であるのですが、しかし、この神様の近さであります、それは、私たちが普段感じるような内輪レベルの話ではありません。深く、豊かなものであり、まただから、三位一体なる神様を信じる私たちの関係性について、御言葉は「神の家族」と呼んだりもするのです。では、ここからイメージすることは、具体的にどのようなものなのでしょうか。

「家族」は人間の成長において欠かすことのできないものであり、それゆえ、私たちの人生における土台ともなる大切なものです。ですから、かつてサザエさんが国民的番組と言われたように、これまでこの「家族」については悪い意味で語られることはありませんでした。しかし、家族内、家族間の様々な問題が取り出されている現代においてはどうでしょう。「家族」は必ずしもいいイメージだけで語られるわけではありません。その反対のイメージがクローズアップされることも多く、そこで、取り沙汰されたことが閉ざされた関係性ゆえの歪みです。それは、家族としての機能不全、関係性の破綻などによって生じた歪みが、親子、夫婦関係に止まらず、中でも、子どもの成長などに深刻な影響を与えているからです。それゆえ、「家族だから」というこの一言は、かつてのようにそれだけで私たちが安心させるものではありません。

ん。問題は複雑化し、深刻化してきているからです。従って、家族という言葉には、かつてとは違ってそういう一面が加えられてきているように思います。しかし、その反対にそうした状況を憂いてのことでもあるのでしょうか。破綻しつつある家族像の再生を願い、その模範的な姿、一つの理想像を追求する動きも活発化してきているのです。

このように、「家族」という言葉を安易に用いることが難しくなっている昨今、「家族」という側面からだけで信仰を語ることはそれゆえに難しく、信仰のハードルを一段高くしているのは間違いありません。けれども、それによって、教会がこれまで大切にしてきた「家族」というこの恵み、この営みを不要なもの、役に立たないもののように扱ってしまっているのかとも思うのです。それだけではありません。私たち信仰者自身がそういう昨今のものの考えに引きずられ、家族というものに悪いイメージを抱いたまま御言葉に聞き、そこから御言葉を理解したらどうということになるのでしょうか。しかし、そうであればこそその反対にこうも思うのです。悪いイメージを持たないということは大切なことではあるのですが、では、家族というこの言葉に私たちがいいイメージを持つにはどうすればいいのでしょうか。先ほども少し触れましたが、家族についての見直しが叫ばれる一方で、家族としての純粋性やその理想像を追求する動きもあるのです。そして、その場合の理想像とは、時計の歯車を逆回転させる事によってでしか得られないことが多く、それゆえ、その固定観念を人に強制、強要したりもするのです。しかし、強制によって得られるものは幻想に過ぎません。それがどんなに人々の心に強く訴えかけるものであったとしても、メッキはいずれ必ずどこかで剥がれることになるからです。けれども、価値観が多様化し、これが家族だとはなかなか言えない現状にあっては、理想像を明確に語るその姿勢は人々の支持を受けやすく、それゆえ、私たちもそうした力を侮ることはできません。かつてあった美しい時代の再現は多くの

人々にとっては魅力的であるだけでなく、その思いはとても強固なものでもあるからです。そして、そうした傾向は私たちの住む日本だけではなく、トランプ然り、プーチン然り、アメリカでもロシアでも、さらには世界中の至る所で見られることでもあるのです。

ですから、そうした現状にあって、一つの価値観を明確に語ることは、誤解を招くだけでなく、大きなリスクを伴うことでもあるのでしょうか。そして、この日のイエス様のお言葉がまさにそういうものの一つであるように思うのです。ただ、この状況のただ中に送り出されることになるのが弟子たる私たちでもあるのです。そして、その送り出される先とは、私たちの語る言葉がまったく通じない、届かない世界であるということです。ですから、「狼の群れに羊を送り込むようなものだ」とのイエス様のこのお言葉は、そういう意味で、弟子たる者の置かれた状況をとくに際立たせているように思います。そして、それがここで最初に語られているということはつまり、それを理由に私たちはイエス様のお言葉を曖昧にしたり、あるいは、その説明だけで終わったりすることはできないということです。つまり、ここに記されていることは、そうさせないために釘を刺しているとも言えるのですが、それは、福音宣教というものが、福音の語り手と直接関わりのないところで力を持つものではないからです。福音の力が問われ、試されるところとは、弟子たる私たちの送り出されるその先であり、弟子たる者の置かれた現実そのものにおいて、私たちは、福音の力を身をもって現さなければならぬのです。ところが、送り出されるその先は、今申しましたように、私たちの言葉が通じない世界であり、できることは非常に限られたところでもあるのです。にもかかわらず、私たちはそこで福音を宣べ伝えなければならぬ。ここに私たちの置かれた過酷な定め、状況を見ることができのですが、意外なことに、ここでイエス様は、弟子たちを死地に送り込むようにその覚悟のほどを語ることはしません。

福音宣教は強制的になされるものではありません。それは、弟子たる私たちの置かれた状況がいくら強制したところで、それで何かが変わるものではないからです。では、イエス様が弟子たる私たちに語るこの厳しい現実を、私たちはど

のように受け止め、どのようにその御心に応えて行けばいいのでしょうか。私たちはこのことを深く考えなければなりません。ただし、それは、私たちが何ができるか、何がしたいかということではありません。求められていることは、自らの立場を正しく認識することです。つまりは、自らに与えられた十字架を正しく、ふさわしく担うということです。そして、それが、「蛇のように賢く、鳩のように素直に」と言われていることでもあります。ですから、ここから分かることは、弟子たる私たちを送り出すイエス様のその意図は、現実を見ない、硬直したものではないということです。柔軟性に富んだものであり、それゆえ、私たちを生かすものでもあるということです。しかし、イエス様のその気持ちを理解したとしても、それで私たちの置かれた現実が変わるものではありません。絶えず周囲を警戒しなければならず、また、いつその身に危険が及ぶかも分からない、そういう現実に生きているのが弟子たる私たちであるということです。ですから、それは、単に警戒を怠るなという覚悟の問題に止まることはありません。東西冷戦下の東ドイツのように、家族が家族を密告し、また、友人といえども、心から信頼できるかも分からない、そういう状況下に生きているということです。「兄弟は兄弟を、父は子を死に追いやり、子は親に反抗して殺すだろう」とイエス様が仰ることは、私たちが単に言葉の通じない世界に生きるだけでなく、背後からいつ刺されてもおかしくはない、そういう状況に生きていることを物語っているということです。ですから、弟子たる身分に置かれているがゆえにこの三位一体の神様との関わりがどんなに近かったとしても、この過酷な現実の中では、その気持ちがいつ萎えたとしても不思議ではありません。

それゆえ、このイエス様を信じるがゆえの迫害、差別は過酷という言葉だけに収まりきるものではありません。それが現実となった時、誰もが感じることはその耐え難い苦痛であるからです。それゆえ、そのことを想像する時、それに耐えられる者が果たしてどれだけいるのだろうかと思うのです。特に、歯医者に行くことにさえ躊躇する私のような者が、ここで語られている苦痛に耐えてみせるとはなかなか口にすることはできません。皆さんはいかがでしょうか。自信をもつ

て耐えてみせる、そう思える人は立派だとは思いますが、恐らくは、ほとんどの方はそうではないと思うのです。けれども、それが分かっているからこそ、私たちはどうすればいいのか、イエス様はその私たちに何を伝えようとされているのか、このことをはっきり知ることとはとても大切なことだと思うのです。

そこで、もう少し詳しく御言葉に聞いていきたいのですが、先ず語られていることは、弟子たる私たちが送られるその場所です。イエス様はそれを「狼の群れに羊を送り込むようなものだ」と仰り、また、それに耐えるために「蛇のように賢く、鳩のように素直になりなさい」と仰るのです。ですから、狼の群れに放り込まれるのが避けられない以上、私たちがこの過酷な現状に耐えるためには、蛇のように、また、鳩のように、振る舞わなければならない、またそうならなければならない、ということです。それゆえ、それがこの過酷な状況に置ける私たちの課題であると言えるのでしよう。ですから、これについては、私もこの御言葉に出会った最初から肯けるものでもありました。世知辛い世の中であって、それが私たちが生き残る上での知恵であり、なにより、この柔軟さこそが生き残る上での生存戦略であるとも思ったからです。けれども、もう少し踏み込んで考えるとどうでしょうか。鳩であり、蛇であるということは、食うか食われるかの関係性であり、この対立を私たちは自らの中に認めなければならないということです。そして、このことが何を意味するかといえば、私たちが純粋なだけでも生きてはいけないし、また、自由に振る舞うだけでも生きていけない、そういう矛盾する存在であることを、この御言葉は示唆しているということです。従って、この矛盾を手なずけることが私たちの生存戦略上の必須条件だとも言えるのでしよう。しかし、イエス様が仰りたいことはどうやらそういうことではないようです。

イエス様はここで「あなたがたは地方法院に引き渡され、会堂で鞭打たれるからである。また、わたしのために総督や王の前に引き出されて、彼らや異邦人に証しをすることになる。引き渡されたときは、何をどう言おうかと心配してはならない。そのときには、言うべきことは教えられる。実は、話すのはあなたがたではなく、あなたがたの中で語ってくだ

さる、父の霊である。」と仰っているのですが、イエス様が蛇のように、鳩のよようにと仰ることは、この状況の中でこそ意味を持つものでもあるのです。ですから、そこから分かることは鳩や蛇を手なずけることではありません。むしろ、何もしないまま、何も変わらないまま、つまり、矛盾を抱えたままにいます。けれども、このような状況に立たされた時の私たちはそこで何を思うのでしようか。そこで子どもの頃を思い出すのですが、こういう経験を繰り返す中で渡しの思ったことは、蛇や鳩を手なずけることではありません。求めるものは、もっと力のあるもの、それは虎であったり、ライオンであったり、龍であったり、それこそ、悪魔すらも手なずけ、矛盾を顧みずに意のままにすべてのことを操りたいと、そう思うものでありました。そして、それは、大人になった今も本質的には変わりません。しかし、それゆえにまた思うのです。イエス様が私たちに仰ることは、私たちが自らの力をもって変わるものでもなく、また、人間以上の何かの力を借りて、私たちが人間以上の存在になれるものでもないということです。「実は、話すのはあなたがたではなく、あなたがたの中で語ってくださる、父の霊である。」と仰るように、私たちが、父、子、聖霊なる神様との交わりの中に置かれているがゆえに、そうであるからこそ、この神様に守られ、私たちは変えられていく、自らが変わるのでなく、御心にふさわしく必ず変えられていく、「鳩のように、蛇のように」と言われていることは、私たちがそのまま変わりうるものであることをイエス様は語っておられるのです。それは、弟子たる私たちが遣わされるその先には、何があろうとも変わらないこの神様と私たちとの関わりがあるからです。それゆえ、その私たちが神様によって守られ、御心によってふさわしく変えられていく、イエス様のこのお言葉は、そのことを私たちに明らかにするものでもあるのです。

先日、ハヤブサがリュウグウより持ち帰ったものの分析結果が明らかになりましたが、その中には生命誕生に関わる様々なアミノ酸がいくつも見つかったとのことでありました。そこで、仮説として語られたことは、隕石のもたらしたアミノ酸が途方もない年月の中で海の中で生命へと変化していったということでも

ありました。そして、そこで思ったことは、この仮説がもし正しいとしたら、生物の授業で習ったように、生命の本質とは、「なる」ものであるということです。つまり、生成変化するものであり、自らが変わろう、なろうとするものではないということです。ただし、そこには途方もない時間を必要としているということです。そして、このことはまた、聖書の御言葉に反するものではありません。また、イエス様がこの日の御言葉において語っておられることとも矛盾するものではありません。なぜなら、私たちにこうして与えられている命の本質は、私たちを強制し、今とはまったく異なる別の何かにさせるものではないからです。その御心によって必ず変えられていくし、新たなものにされていく、この自ずと「なる」というところに現されるものが私たちの命であるのです。つまりは、続いていく、続けられていくものであり、その中で御心にふさわしく変えられていくということです。そして、それが私たちに許されるのは、私たちが父と子と聖霊なる神様との交わりの中に置かれ、生きていくからです。

先週、この事をこの春幼稚園を卒園したばかりの子どもをを通して知らされたのですが、小学校に進学するという事は子どもにとっては環境が大きく変わり、ましてやこのコロナ下にあつては、私たち大人が考えている以上に、過酷な現実でもあるのです。友達を作りたくても、話してはダメ、長く一緒に遊んではダメ、早くお家に帰りなさい、これで学校が楽しいわけはありません。それゆえ、その子は学校に行き渋るようになり、そして、その話をお母さんから聞いたのが、ちょうど一月ほど前のことでもありました。ところが、先週、その後について伺ったところ、いまでは友達もでき楽しく学校に通っているとのことでありました。そこで、二人して発した言葉は「必ずなんとかなる」ということでした。ただ、だから、何でもかんでも必ずそうなるということを申し上げたいわけではありません。変わるということとは、奇をてらったり、ましてや強制することで何とかなるものではないからです。必ずそうなることを待つということであり、ありもしない純粋性に訴えたり、あるいは、操られ、思い込まされる自由によってもたらされるものでもないということです。そういうまやかしのよう

なの力を借りることでそうなるのではなく、続けていく中で必ず実現される、私たちの信仰とは、このように待つこと中で大きな力を発揮するのです。そして、それが十字架を担うということであり、御心に委ね、御心が現されるのをどこまでもどこまでも待ち続けることなのです。

ですから、そこで大切なことは続けることであつて、自分の思いを何が何でも遂げようとするものではありません。家族内での機能不全、関係性の破綻、そして、その危険性の増大が、私たちに理想を追求させ、是が非でもその思いを遂げよう、実現しようとするのですが、ところが、私たちの意に反して、私たちを決して幸せにすることはありません。それは、自分の思いを成し遂げようとするがあまり、現実を見ないからであり、関係性の歪みはそれゆえのものでもあるのです。しかし、そのことを私たちは誰も責めることはできません。なぜなら、私たちの置かれた現実はそのほど過酷なものであり、それゆえ、どうしても変化を求めてしまうものでもあるからです。けれども、その私たちは一人ではありません。そこにイエス様は私たちと共にいてくださっているのです。三位一体の神を私たちが信じるということは、今ここにイエス様は共におられるということであり、そして、それを明らかにし続けてきたのが私たちでもありました。ですから、信仰とは、神様にしがみつくことでもなければ、神様によって意のままに操られることでもありません。時に表面上はそう見えることがあつたとしても、共に暮らし、共に歩み、共に生きるところで必ず見えてくるものでもあるのです。だから、御言葉はそういう私たちのことを神の家族と言っているのですが、それは、生きるというこの過酷な現実の中にあつて、神様とイエス様は必ず「ここ」におられるからです。私たちはこの現実、この事実を信じ受け入れているのです。ただ、それが分からないという方もきっとおられることでしょう。けれども、心配には及びません。そうなっていくし、必ずそうなるようにできているのが私たちであるからです。なぜなら、三位一体なる神様との交わりに生きる私たちと神様とは、私たちが思っている以上に近いものであるからです。祈りましょ